JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES
JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

8期－5号

2011.03.10

目　次◆CONTENTS

はじめに／西村幸夫　01
From the President / Yukio NISHIMURA

2010年次第4回拡大理事会報告（12/18）／山田幸正　02
4th Meeting of the Executive Board, 18th Dec. 2010
/ Yukimasa YAMADA

日本イコモス国内委員会2010年次総会記録（12/18）／山田幸正　06
2010 General Assembly of Japan ICOMOS NC, 18th Dec. 2010
/ Yukimasa YAMADA

日本イコモス国内委員会研究会「産業遺産の世界遺産登録」報告　22
Japan ICOMOS NC Study Session, "Industrial Heritage and World Heritage Nomination"

国際セミナー報告「五重塔はなぜ倒れないか。ギリシャ神殿はなぜ倒れないか」／山田幸正　23
International Symposium, "Why don't Japanese Five-story Pagodas fall? Why don't Ancient Greek Temples fall? " / Yukimasa YAMADA

第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「『復興』と文化遺産」開催報告／友田正彦　24
34th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property, "Reconstruction Process" and Cultural Heritage
/ Masahiko TOMODA
＜インタビュー＞ニコラス・スタンリープライス氏（前イクロム事務局長）
Interview : Mr. Nicholas Stanley-Price (Former Director General, ICCROM)

イコモス会員カードの提示による姫路城縦覧料等の不徴収について／崎谷康文　25
Use of ICOMOS Membership Card for the Waiver of Himeji Castle Admission Charge / Yasufumi SAKITANI

■自著を語る ＜Self-Introduction of New Publication＞　27
上野邦一著『建物の痕跡をさぐる』
"Seeking Vestiges of Buildings" by Kunikazu UENO

■会員からの声 ＜Posting from Members＞　28
サワナケート歴史地区／磯野哲郎
Historic Downtown of Savannakhet / Tetsuo ISONO
ハイチの文化財保護とアルベール・マンゴネス／荒井芳廣
Albert Mangones and Cultural Protection in Haiti / Yoshihiro ARAI

事務局日誌　Diary　30

はじめに

西村幸夫

文化庁が歴史文化基本構想の重要性を強調して、文化財総合的把握モデル事業を始めて今年が3年目、補助事業の最終年です。個々の文化財を個別に指定・保護することを越えて、あるストーリーのもとにひろく面的に保全していくということ、さらには点としての文化財の周辺にバッファーゾーンを面的にかけるという発想で、関連文化財群や保存活用区域の議論が20のモデル地区それぞれで繰り広げられています。

考えてみると、こうした考え方は世界文化遺産の考え方ともぴったりと合っています。むしろ、国内の世界遺産暫定一覧表の改訂の議論を経験して、こうした発想が大切だということから歴史文化基本構想は出発しているともいえるのです。

2011年度からは歴史文化基本構想を全国の自治体で作成してもらうための手引き書を作るといった作業も本格化していくようです。また、2011年度予算には「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」が元気な日本復活特別枠として70億円が計上されることとなり、この点でも文化のマスタープラン、さらにいうと地方レベルでの文化政策そのものの重要性はさらに増しているといえます。

日本イコモスとしても、こうした流れを前に進めるべく、メンバーの助力を得て、各地での活動を支援していきたいと思います。新次元の文化政策を目指して、皆様のさらなるお力をお借りしたいと思います。

2010年次第4回拡大理事会報告

2010年次第4回拡大理事会が去る2010年12月18日（土）午前10時から12時まで、東京文化財研究所地下1階会議室（東京・上野）で開催された。出席者は、委員長：西村幸夫、副委員長：赤坂　信、小野　昭、事務局長：矢野和之、理事：尼崎博正、苅谷勇雅、岸本雅敏、杉尾邦江、鈴木博之、西浦忠輝、濱崎一志、前田耕作、宗田好史、山田幸正、渡邊保弘、本部執行委員：岡田保良、顧問：前野まさる、ISC委員：杉尾伸太郎、秋枝ユミイザベル、事務局：舘崎麻衣子、藤岡麻理子の21名である。拡大理事会で討議された審議事項、協議事項、報告事項は以下の通りである。

審議事項

1. 入退会者の承認

1）入会者

申請書類の回覧、審議の結果、以下の個人会員4名と維持会員1団体の入会が承認された。

個人会員

氏　名	勤務先	専門分野	推薦者
北河大次郎（きたがわ だいじろう）	ICCROM、Sites Unit プロジェクトマネージャー	近代化遺産、土木史／都市計画および国土計画　博士（フランス）	西村幸夫・矢野和之
北村　亮（きたむら りょう）	佐渡市世界遺産推進課課長	日本考古学	西村幸夫・矢野和之
深見奈緒子（ふかみ なおこ）	早稲田大学イスラーム地域研究機構、研究院准教授	イスラーム建築史、インド洋建築史／博士（工学）	岡田保良・矢野和之
山田大隆（やまだ ひろたか）	酪農学園大学教職センター（理科教育）、教授	産業考古学、高分子化学／理学修士	粟野　宏・伊東　孝

維持会員

組織名	代表者氏名	業務内容・専門分野	推薦者
佐渡市（さどし）	高野宏一郎	世界遺産暫定一覧表記載資産の所在する地方公共団体	西村幸夫 矢野和之

2）退会者

以下の個人会員15名と維持会員1団体の退会が承認された。

個人会員　15名

氏　名	専門分野	退会理由
井手久登	緑地	一身上の都合
加藤晋平	先史考古学	一身上の都合
兼松紘一郎	建築設計	一身上の都合
木原啓吉	環境政策	一身上の都合
小関久乃	水文学、砂防学、世界遺産学	一身上の都合
近藤公夫	造園学	健康上の都合
高瀬　裕	デジタルアーカイブ、ビジュアライゼーション、デジタル測量	一身上の都合
福本都治	建築	ご逝去
藤本　強	考古学	ご逝去
古田陽久	ユネスコ世界遺産の研究	諸般の事情
宮川朝一	土木工学・都市計画	一身上の都合
森下　満	都市計画	一身上の都合
横山晋一	歴史的建造物保存	一身上の都合
横山光雄	造園・緑地学	ご逝去
吉田博宣	造園学	一身上の都合

維持会員

組織名	専門分野	退会理由
㈱京都科学	文化財修復・複製、文化施設の設計・施工	会社の都合

3）日本イコモス国内委員会 会員数（今回の入退会者を含む）

個人会員　380＋4－15＝369名

維持会員　15＋1－1＝15団体

協議事項

1. 2011年理事会等のスケジュールについて

2011年度の拡大理事会の開催日程について、3月

12 日（土）、6 月 11 日（土）、9 月 10 日（土）、12 月 17 日（土）が矢野事務局長より提案され、協議の結果、提案通り了承された。また、9 月 10 日の理事会を彦根市で開催し、翌日 11 日（日）に彦根城・城下町の視察および彦根城世界遺産登録に関する研究会を彦根市主催で行うことがあわせて承認された。

2. 2011 年イコモス本部総会（パリ）について

西村委員長より、イコモス本部総会がフランス・パリにおいて、下記の通り、2011 年 11 月 25 日（金）から 12 月 3 日（土）に開催されることが報告された。なお、総会のテーマは "Heritage : Driver of Development" である。

●イコモス総会（パリ）にかかわる主な行事と日程

11/25 本部執行委員会

11/26 午前：諮問委員会、午後：学術カウンシル

11/27 午前：総会開会・本部執行委員会、午後：諮問委員会、夜：レセプション

11/28 午前：総会・開会セレモニー、午後：学術シンポジウム、夜：地域別会合

11/29 学術シンポジウム

11/30 午前：学術シンポジウム、午後：総会・選挙、夜：ISC イベント

12/1　午前：総会・決議、午後：閉会セレモニー、夜：ガゾーラ賞レセプション

12/2　イコモスの新オフィス見学

12/3　午前：新執行部による委員会、ポストカンフェランスツアー

次期本部執行委員の日本からの候補者として、西村委員長より河野俊行副委員長が推挙され、理事会としてこれを承認した。なお、上記日程の通り、本部執行委員の選挙は 11 月 30 日（水）に行われる予定であることが周知された。また、総会とあわせて行われる学術シンポジウムへの論文募集が、近日中に上記総会テーマにそって募集される予定であり、奮って投稿されるよう要請された。

3. 世界遺産条約 40 周年記念イベントについて

世界遺産条約締結 40 周年の記念行事が 2012 年 11 月 16 日、日本において開催される予定であり、そのための委員会が、近々、文化庁内に立ち上げられる予定となっている。このイベントに関して、日本イコモス国内委員会も組織として支援していくことが前回理事会（9/18）において承認されたが、西村委員長より、世界遺産小委員会（第 4 小委員会）を中心に、その具体的な検討を行っていくことが提案され、それを承認した。

4. ICOMOS の新プログラムへの参加について

国内委員会が設立されていない国に対する設立支援、または国内委員会はあるもののその機能が弱い国に対する支援について、イコモス本部より意思の照会がきている。いずれも想定されているのはバイラテラルでの支援である。回答期限は 12 月 10 日となっているが、本理事会の協議を待って回答する旨、本部に連絡した。以上のような報告が委員長よりなされた。前田理事より、本件に関しては文化遺産国際協力コンソーシアムに提起してみてはどうか、との提案がなされ、2011 年 1 月のコンソーシアム企画委員会の協議結果を待って回答することとした。

5. ICOMOS Member and Expert database について

イコモス会員の情報を各自がウェブ上で入力するというデータベースの計画がイコモス本部において進んでいることは、先の諮問委員会報告（Information 誌 8 - 4 号）で報告したが、先日、国内委員会事務局にこの専門家データベースの管理者 "Membership manager" を 12 月 30 日までに知らせるよう、本部から連絡が来た。以上のような報告が矢野事務局長よりなされた。紙媒体からの移行が長年にわたり議論検討されてきたようであるが、このままでは個人データが非常に重くなるのではないか、記入する書式が複雑で多くの会員が情報を寄せないのではないか、"Membership manager" とは何か、

など多くの疑問があることが指摘された。今後、事務局が窓口となって本部に詳細を問い合わせ、かつ、3 月の執行委員会でこのデータベース化の計画内容等を岡田執行委員に確認いただくこととした。

6. ISC の活動について

1) CIAV（Vernacular Architecture）

CIAV の VOTING MEMBER を 2011 年から山田幸正理事に交替したいとの提案が前野まさる顧問からなされ、了承した。なお、ASSOCIATE MEMBER は引き続き大野敏氏にお願いする。今後、事務局を通じて、CIAV 委員長 Marc de Craffe 氏に通達いただくこととした。

2) CIVVIH（Historic Towns and Villages）

上野邦一委員より、CIVVIH の委員を辞退したい旨の連絡があったことが、矢野事務局長よりなされた。福川裕一委員と協議のうえ、後任を推薦するよう要請することとした。

3) SBH（Shared Built Heritage）

当該国際学術委員会の委員長である Siegfried RCT Enders 氏からの書簡で、日本人メンバーの参加を呼びかけている旨、報告があった。委員である布野・村松両氏に対して、若手メンバーの補強などを要請することとなった。

4) CIPA（Recording and Documentation）

高瀬裕氏の退会にともなって、山田修委員に委員の人選を要請することとなった。

7. “Monuments” の日本語訳について

“Monuments” は「記念建造物」と訳すべきで、日本イコモス国内委員会のウェブサイトにはそのことへの配慮がみられない。また、ICOMOS も「国際記念物遺跡会議」ではなく、「国際記念建造物遺跡会議」となるのではないか、理事会で検討してほしいなどの意見が会員から寄せられていることが、矢野事務局長から報告された。

ほかにも “Site” などの用語などで同様なことが指摘できる。こうしたことは過去の理事会の場でも議論され、そこでは「現在使われている訳語についてはさまざまな経緯や背景などがあり、現状ではそのままとし、個別の議論の際、できるだけ正確に表現／表記するようにする」としたとの意見があった。また、日本イコモス国内委員会のホームページにおいて、それぞれの用語の解説を示したらどうか、との意見もあった。

8. 法人化について

日本イコモス国内委員会を現行の任意団体から一般財団法人に移行することに関して、現行規約と定款とのすり合わせがまだできていない状態である。今後、このすり合わせを行うとともに、財団法人化した時の会計規則などについてもよく検討する必要がある。2011 年次においては、スケジューリングをきちんと行って実現に向けて準備したいとの意思表明が矢野事務局長からなされ、これを了承した。

9. ICOMOS カードの特典について

本件については、2010 年次第 1 回拡大理事会(3/6) よりとり上げて議論してきたが、前回理事会で崎谷監事のご尽力により、姫路城見学の際の減免措置されるようになった。以上の通り、岸本理事より報告された。今後、同様に、世界遺産の登録物件などで、こうした特典の拡大を図っていくことが必要であることが確認された。

1. ICOMOS 諮問委員会および執行委員会について

去る 10 月 26 日から 31 日にかけてアイルランド・

ダブリンで、標記の本部役員会議等が開催され、岡田本部執行委員と西村委員長が出席した。会議の内容などの報告については、インフォメーション誌8-4号に掲載されている。

2. 日本イコモスの活動のための科学研究費申請について

国内外でのイコモス関連の会議や研究会などの活動を補助することを主な目的に、11月はじめ、以下の通り、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤A）の申請をしたことが、岡田本部執行委員より報告された。申請のための準備期間が非常に短かったため、本申請に際しては限られた方でメンバーを構成したが、採択された際には、幅広く参加を呼びかけることになる、との補足説明がなされた。

申請の内容は以下の通り。

■課題名：日本における世界文化遺産の系統的モニタリング方法確立に関する研究

■期間：平成23～25年度

■経費総額：2,671万円　基盤A（一般）

■主旨：世界文化遺産の評価等にかかわる国内の専門家が一堂に会し、実地の調査をもとに、世界文化遺産のモニタリングの科学的な方法を確立するための研究を行う。

■研究代表：岡田

分担・連携：赤坂、稲葉、河野、清水、西浦、西村、宗田、濱崎、山田

■取扱機関：国士舘大学（学術研究支援課）

3. ISC / 専門分野別メーリングリスト作成のためのアンケートについて

最近、イコモス本部、各ISC、オーストラリアイコモスなど、今まで以上に多くの情報が事務局に届くようになっている。このような情報量の増大のなかで、事務局では、その問題に関心のある会員にできるかぎり的確に情報が届けられるよう、前回理事会（9/18）での決定にしたがい、専門分野別のメーリングリスト作成に向けたアンケートを行っている。これまで、事務局ではなくISC委員に直接届いていた情報なども、専門を同じくする会員の間で共有できるようになれば、情報サービスの向上にもつながるものと考えている。以上の通り、矢野事務局長より報告があり、これを了承した。

4. 東京倶楽部助成事業「CIIC・日本イコモス国内委員会共同国際研究会」について

標記国際研究会は東京倶楽部の助成をうけ、第1回国内研究会を平成22年10月25日（月）日本イコモス国内委員会事務局会議室において、第2回国内研究会を11月13日（土）同じく事務局会議室において開催した。CIIC・日本イコモス国内委員会合同第1回国際研究会は去る11月23日からスペイン・マドリッドで開催されたCIIC総会の開催期間の11月25日に同総会会場にて日本側はCIICのメンバーである杉尾邦江及び大野渉が出席して行った。以上の通り、杉尾邦江理事より報告された。

5. 総会議案書の確認

午後からの総会にむけて、議案書の内容等を確認し、あわせて各項目の担当者などを協議し、決定した。

また、2010年次会計報告および監査報告、2011年次予算案をそれぞれ承認した。

（記録：山田幸正）

前野まさる　画

日本イコモス国内委員会 2010 年次総会記録

日本イコモス国内委員会 2010 年次総会が去る 2010 年 12 月 18 日（土）午後 1 時半から 3 時半まで、東京文化財研究所地下 1 階セミナー室（東京・上野）で開催された。出席者 61 名と委任状提出者 165 名、あわせて 226 名で、定足数（会員の過半数）を満たした。議長は、事務局提案通り、苅谷勇雅氏が選出され、議事進行にあたった。討議された報告事項、審議事項、協議事項は以下の通りである。

1. 2010 年次　一般報告

1）イコモス本部執行委員会関連報告

2010 年の定例執行委員会 Executive Committee meeting は、3 月 11 ～ 13 日にパリ本部で開催され、主な議題としては、2009 年 10 月議事録、2009 年事業財務報告、2010 年事業財務計画、イコモス規約（中央と各国）、各国委員会及び学術委員会メンバーシップ、個別の事業（地震対応・モニタリング・世界遺産 WG・出版等）、2011 年第 17 回総会次第、2010 年諮問委員会次第などであった。

10月 26～31日、アイルランド・ダブリン市で、定例諮問委員会Advisory Committee（27 ～ 29日、NC 会議、SC会議、総会）、執行委員会Executive Committee（26日および31日）、学術シンポジウム Scientific Symposium（30日、テーマ：Heritage and Social Change）が開催された（詳細はInformation誌 8-4号参照）。

12 月 2 ～ 5 日には、パリ本部で、2010 年度世界遺産パネル会議 World Heritage Panel が開催された。

（岡田保良）

2）2010 年度日本イコモス国内委員会理事会

1 月 29 日に臨時理事会、3 月 6 日に第 1 回拡大理事会、6 月 19 日に第 2 回拡大理事会、9 月 18 日に第 3 回拡大理事会、12 月 18 日に第 4 回拡大理事会をそれぞれ開催し、各回の議事内容等は JAPAN ICOMOS INFORMATION 誌 8 期 1 号～ 4 号に掲載した。

3）主催・共催・後援事業

■主催事業・イベント

3 月 6 日　研究会「ハーグ条約と自然災害時の文化財保護―軍隊における実践例と国際協力の枠組み」（藤岡麻理子）

6 月 19 日　研究会「エルサレムとイスラエル―世界遺産の保全の現状について」（稲葉信子）

9 月 9 日　平泉の世界遺産登録に関わる現地視察した王力軍氏をむかえての歓迎会

9 月 18 日　京都・琵琶湖疏水の見学会

10 月 18 日　講演会「スコットランドの世界遺産」（Miles Oglethorpe 博士／ Historic Scotland）

11 月 8 日　Siegfried RCT Enders 氏（ICOMOS Germany、ISC on Shared Built Heritage 委員長）とのランチミーティング

■共催事業

9 月 12 日、10 月 5 日　世界遺産セミナー「熊野古道と文化的景観」（三重県教育委員会、熊野市教育委員会、尾鷲市教育委員会、東紀州観光まちづくり公社との共催）

11 月 20 日「五重塔もパルテノン神殿もなぜ地震で倒れないか？」地震国古代建築の耐震構造―パルテノン神殿と法華経寺五重塔の耐震性観測報告（中山法華経寺、三重大学との共催）

■後援事業

3 月 13、14 日　シルクカントリー in 伊勢崎（主催：文化庁、群馬県、伊勢崎市、フィールドミュージアム「21 世紀のシルクカントリー群馬」推進委員会）

9 月 4、5 日　シルクカントリー in 下仁田（主催：群馬県、下仁田町、フィールドミュージアム「21 世紀のシルクカントリー群馬」推進委員会）

9 月 19 日　琵琶湖疏水竣工 120 周年記念シンポジウム 琵琶湖疏水を世界遺産へ！（主催：京都商工会議所）

9 月 21 日　第 5 回文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利用に関するワークショップ（主催：動体計測研究会(ARIDA)）

9 月 26 日　国際シンポジウム「文化遺産を災害からどう守るか：防災と災害復旧」(主催：立命館大学歴史都市防災研究センター)

10 月 17 日　世界遺産国際シンポジウム「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」(主催：文化庁、新潟県、佐渡市)

11 月 5〜7 日　第 33 回全国町並みゼミ盛岡大会「暮らしのいきづく町並み〜住民による歴史まちづくり」(主催：特定非営利法人全国町並み保存連盟、第 33 回全国町並みゼミ盛岡大会実行委員会)

11 月 14 日　第 2 回錦帯橋シンポジウム「錦帯橋の唯一性を問う！—世界にアーチ構造の木造橋はあるのか？—」(主催：岩国市)

11 月 28 日　富岡製糸場と絹産業遺産群　国際シンポジウム(主催：文化庁、群馬県)

4) 新入会員および退会者の承認

■ 新規入会者(2010年1月29日〜2010年12月18日)

個人会員

氏　名	勤務先	専門分野	推薦者
臨時理事会（2010 年 1 月 29 日）承認			
清水慶一 (しみず けいいち)	国立科学博物館 産業技術史資料 情報センター 参事	産業遺産、近代遺産 工学博士	西村幸夫・矢野和之
山下保博 (やました やすひろ)	(株)アトリエ・天工人 代表取締役	建築	前野まさる・三宅理一
日置雅晴 (ひおき まさはる)	神楽坂 キーストーン 法律事務所 弁護士	法律	西村幸夫・矢野和之
狩野朋子 (かのう ともこ)	帝京平成大学 現代ライフ学部 助教授	都市解析、都市・建築計画、地域・観光開発 工学博士	佐々波秀彦・矢野和之
第 1 回拡大理事会（2010 年 3 月 6 日）承認			
渡辺洋子 (わたなべ ようこ)	芝浦工業大学 工学部 建築工学科 教授	日本建築史／建築技術史／集落・都市形成史 工学博士	前野まさる・三宅理一
木島隆康 (きじま たかやす)	東京藝術大学 文化財保存学 専攻保存修復 (油画) 教授	文化財保存修復 (特に油絵修復)	舘崎麻衣子・前野まさる
大竹幸恵 (おおたけ さちえ)	長和町教育委員会 黒曜石体験ミュージアム 文化財係長　学芸員	考古学	小野　昭・岸本雅敏
第 2 回拡大理事会（2010 年 6 月 19 日）承認			
石村　智 (いしむら とも)	独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所	考古学／文学博士	田辺征夫・平澤　毅
伊藤邦明 (いとう くにあき)	伊藤邦明都市建築研究所	建築デザイン学／工学博士	石川慎治・西　和夫
(ダーリング) 常田益代 (ときた ますよ)	北海道大学 留学センター 国際広報メディア・観光学院	美術史・建築史	柳澤孝次・山田利行
荒井芳廣 (あらい よしひろ)	大妻女子大学 人間関係学部	文化人類学・文化社会学／社会学博士	益田兼房・矢野和之
第 3 回拡大理事会（2010 年 9 月 18 日）承認			
関矢健夫 (せきや たてお)	(株)イムン研究所	文化財保存・修復	甲斐章子・矢野和之
中嶋　徹 (なかじま とおる)	(株)竹中工務店	近代建築の保存・活用	津村泰範・矢野和之
第 4 回拡大理事会（2010 年 12 月 18 日）承認			
北河大次郎 (きたがわ だいじろう)	ICCROM、Sites Unit プロジェクト マネージャー	近代化遺産、土木史／都市計画および国土計画 博士（フランス）	西村幸夫・矢野和之
北村　亮 (きたむら りょう)	佐渡市 世界遺産推進課 課長	日本考古学	西村幸夫・矢野和之
深見奈緒子 (ふかみ なおこ)	早稲田大学 イスラーム地域研究機構、 研究院准教授	イスラーム建築史、インド洋建築史／博士（工学）	岡田保良・矢野和之
山田大隆 (やまだ ひろたか)	酪農学園大学 教職センター (理科教育)、 教授	産業考古学、高分子化学／理学修士	粟野　宏・伊東　孝

維持会員（国内）

組織名	代表者氏名	業務内容・専門分野	推薦者
第3回拡大理事会（2010年9月18日）承認			
㈱ゴールデン佐渡	澤邉 一郎	観光施設（史跡佐渡金山および史跡尾去沢鉱山）	岡田保良 矢野和之
第4回拡大理事会（2010年12月18日）承認			
佐渡市（さどし）	高野宏一郎	世界遺産暫定一覧表記載資産の所在する地方公共団体	西村幸夫 矢野和之

■ 退会者

個人会員

氏　名	専門分野	退会理由
臨時理事会（2010年1月29日）承認		
小林達雄	考古学	一身上の都合
内藤　廣	建築	一身上の都合
南條洋雄	建築	一身上の都合
宇高雄志	都市計画	一身上の都合
第1回拡大理事会（2010年3月6日）承認		
田村　明	都市政策／都市開発／地域開発／等	ご逝去
第4回拡大理事会（2010年12月18日）承認		
井手久登	緑地	一身上の都合
加藤晋平	先史考古学	一身上の都合
兼松紘一郎	建築設計	一身上の都合
木原啓吉	環境政策	一身上の都合
小関久乃	水文学、砂防学、世界遺産学	一身上の都合
近藤公夫	造園学	健康上の都合
高瀬　裕	デジタルアーカイブ、ビジュアライゼーション、デジタル測量	一身上の都合
福本都治	建築	ご逝去
藤本　強	考古学	ご逝去
古田陽久	ユネスコ世界遺産の研究	諸般の事情
宮川朝一	土木工学・都市計画	一身上の都合
森下　満	都市計画	一身上の都合
横山晋一	歴史的建造物保存	一身上の都合
横山光雄	造園・緑地学	ご逝去
吉田博宣	造園学	一身上の都合

維持会員

組織名	専門分野	退会理由
第4回拡大理事会（2010年12月18日）承認		
㈱京都科学	文化財修復・複製、文化施設の設計・施工	会社の都合

日本イコモス国内委員会 会員数 (2010.12.18 現在)

個人　369名　　維持会員　15団体

5）担当理事報告

■会員担当：岸本雅敏・前田耕作・西浦忠輝

今年次における会員の動向は以下の通りである。

		個人会員	団体会員	維持会員 国際	維持会員 国内	名誉会員（顧問含）
2009年度	12月末	372	0	0	14	5
2010年度	12月10日現在	380（+13−5）	0	0	15（+1）	
	12月18日現在	入会　4 退会　15			1 1	1
	計	369	0	0	15	4

ICOMOS会員カードの特典拡大について、理事会等で議論検討した。世界遺産登録物件である姫路城については減免措置されることとなった。

■事業担当：杉尾邦江・清水真一

上記3）の主催・共催・後援事業のほかに、東京倶楽部の助成事業「CIIC・日本イコモス国内委員会共同国際研究会」を、10月25日（第1回国内研究会）、11月13日（第2回国内研究会）、さらに11月25日にはスペイン・マドリッドで国際研究会をそれぞれ開催した。

■広報担当：山田幸正・苅谷勇雅

これまでと同様、本年もまた、事務局とともに広報活動の面で特に力を注いだのは、JAPAN ICOMOS INFORMATION誌の定期的な発行を通じて、会員全員に対して、理事会や事務局の活動状況をできるだけ速やかにお伝えすることであった。本誌において、各回の理事会や研究会の報告、イコモス本部執行委員会などの報告、国際学術委員会や小委員会の活動報告、日本イコモス国内委員会の共催

／協賛した国際会議・シンポジウム・研究会等の事業報告、日常の会務の記録、各種の文化遺産関連の情報などを掲載した。本誌の企画・編集に関しては、7月20日（参加者：西村、岡田、矢野、苅谷、山田、事務局）と10月21日（参加者：西村、岡田、前野、矢野、苅谷、山田、事務局）の2回、広報関係の企画検討会議を開催し、インフォメーション誌の企画などについて協議した。

【JAPAN ICOMOS INFORMATION 誌】

過去1年間に第8期1号（3月5日、前回理事会により編集発行）、第8期2号（6月18日）、第8期3号（9月16日）、第8期4号（12月15日）と、計4回発行し、全会員に郵送した。理事会の議事内容を報告することを第一義に、毎回、理事会開催前の発行をめざしてきたが、本年度もいずれもなんとかその期日に間に合わせることができた。これはひとえにお忙しいなか、原稿を期日までにお寄せいただいた方々によるところが大きいことを改めて痛感した。この場を借りて深く感謝申し上げたい。また、それぞれの総ページ数は、1号28ページ、2号20ページ、3号24ページ、4号24ページとそれなりのヴォリュームとすることができた。1号では鞆の浦訴訟をめぐる議論、世界遺産条約40周年に向けての話題などを提供することができ、2号ではハーグ条約やハイチ復旧など人災や自然災害における文化遺産保存の問題、石見や平泉での現状における取組みなどを紹介し、3号ではブラジリアで開催された世界遺産委員会の情報を、また4号では本年度日本イコモス国内委員会が共催などで関与して日本各地で開催された国際会議・研究会等の報告を集めて報告することができた。また、今年度から「会員からの声」という欄を設け、広く会員諸氏からの原稿を受け付ける試みを行った。

■ISC関連：小野昭・鈴木博之・前野まさる

最近、イコモス本部、各ISC、オーストラリアイコモスなどの外国から、今まで以上に多くの情報が事務局に届くようになっている。情報量が増える中で、情報をその問題に関心のある会員にできるかぎり的確に届けようと、前回理事会での決定にしたがい、専門分野別のメーリングリスト作成に向けたアンケートを行っている。これまで、事務局ではなくISC委員に直接届いていた情報なども、専門を同じくする会員の間で共有できるようになれば、情報サービスの向上にもつながるものと考えている。

2. 2010年次会計報告

未納会費問題が解消してきた。皆さまの協力に感謝したい。

現在基金はオーストラリアドルで基金運用をしているが、毎月8万円程度の運用益が出ている。また、円高のおかげでユーロ建ての本部会費が安く済んでおり、維持できている状況である。

東京倶楽部から研究助成金を250万いただいており、前年の伊勢会議を受けた活動を日本イコモス・CIIC共同で行うことになっており、2010年から2011年にわたって活用することとなる。

3. 2010年次会計監査報告

会計報告の通り、間違いのないことを確認した。

（監事　崎谷康文）

総会：会場内の様子

日本イコモス国内委員会 2010 年次会計報告（2009/12/11～2010/12/17）

1．前年度より繰越				854,795 円
2．収　入				
会費				6,040,000 円
	会員会費	2006 年分	10,000 円	
		2007 年分	20,000 円	
		2008 年分	400,000 円	
		2009 年分	1,010,000 円	
		2010 年分	3,210,000 円	
		2011 年分	360,000 円	
		超過振込分	90,000 円	
		不明振込分	40,000 円	
	維持会員会費		900,000 円	
繰越金				854,795 円
助成金				2,500,000 円
寄付金				100,000 円
雑収入				133,664 円
利息（普通預金）				575 円
イコモス研究振興基金運用益等				994,533 円
合　　計				10,623,567 円
3．支　出				
研究費				114,360円
ICOMOS本部年会費(40ユーロ×200人、35ユーロ×100人、33ユーロ×66人20ユーロ×6名)				1,493,138円
会員費（超過振込分返金）				130,000 円
会議費（総会・理事会・研究会他）				284,818 円
INFORMATION 誌（編集・印刷費、4 回）				1,033,253 円
通信費				393,510 円
事務用品費				60,721 円
事務局人件費（交通費を含む）				1,141,570 円
慶弔費				25,750 円
雑費				139,964 円
合　　計				4,817,084 円
4．収支（収入－支出）				5,806,483 円
5．銀行預金残高				
普通預金				4,844,371 円
郵便局預金				962,112 円
計				5,806,483 円
6．基金				
足達富士夫基金（普通預金）				5,008,482 円
木の委員会支援基金（普通預金）				3,001,027 円
イコモス研究振興基金(豪ドル債券)				10,116,600 円

以上の通り報告します。2010 年 12 月 17 日

会計担当理事　渡邊保弘

事務局長　矢野和之

会計監査欄

2010 年 12 月 17 日

監事　崎谷康文

4. 2010 年次 ICOMOS 国際会議報告

2010 年に、日本の会員が参加したイコモス関連国際会議は、事務局で把握しているもので、以下の通り（カッコ内は参加者）。

3 月 11 ～ 13 日　本部定例執行委員会、フランス・パリ（岡田保良）

4 月 7 ～ 10 日　文化景観遺産保全国際フォーラム、中国・無錫（杉尾伸太郎・大野渉）

6 月 3 ～ 5 日　ICOMOS-UK 国際会議 Conservation Philosophies: Global or Local?、イギリス・ヨーク（山内奈美子）

6 月 23 ～ 25 日　ISCARSAH 歴史的建築物の解析と構造修復に関する国際学術委員会年次委員会、イギリス・エジンバラ（花里利一・岩崎好規）

7 月 4 ～ 7 日　第 8 回国際組積造会議（8IMC）、ドイツ・ドレスデン（花里利一）

9 月 6 ～ 11 日　IFRAO（International Federation of Rock Art Organizations）Congress、フランス・アリエージュ（小川勝・五十嵐ジャンヌ）

9 月 25 ～ 26 日　立命館大学・イコモス ICORP 国際シンポジウム『文化遺産を災害からどう守るか：防災と災害復旧』、京都（益田兼房ほか）

10 月 4 ～ 6 日　ICOMOS-IFLA 文化的景観国際学術委員会年次総会、トルコ・イスタンブール（杉尾伸太郎・石川幹子・山田素子）

10 月 6 ～ 7 日　ISCARSAH 委員会、中国・上海（花里利一・岩崎好規）

10 月 26 ～ 31 日　本部執行委員会・諮問委員会、アイルランド・ダブリン（岡田保良・西村幸夫）

10 月 26～29 日　チョンジョリ岩面刻画発見 40 周年記念国際研究集会、韓国・ソウル（小川勝）

11 月 23 ～ 28 日　CIIC 文化の道国際学術委員会年次総会、スペイン・マドリッド（杉尾邦江・大野渉）

12 月 2 ～ 5 日　2010 年度世界遺産パネル会議、フランス・パリ（岡田保良）

5. 2010 年次各国際学術委員会（ISC）報告

■Analysis and Restoration of Structures of Architectural Heritage（ISCARSAH：花里利一、岩崎好規、坂本功、西澤英和）

本年の年次学術委員会は 6 月 23 ～ 25 日に英国エジンバラ、10 月 6 ～ 7 日に中国上海で開催され、両委員会に出席した。中国上海で委員会は、10 月 6 ～ 8 日に上海・同済大学で開催された歴史的建造物の構造に関する国際会議 SAHC2010 に合わせて同大学で開催されたものである。6 月および 10 月の国際学術委員会の概要は、ICOMOS INFORMATION の記事として報告しているので参照されたい。

（花里利一）

■Archaeological Heritage Management（ICAHM：岸本雅敏、小野昭）

(1) Voting Member の交替：今年度、小野から岸本に交代し、ICAHM 本部と日本国内委員会の承認を得た。

(2) ICAHM のアジア地区担当副会長の任にある小野は、会員登録委員会（Board of Registration）の委員を併任しており、会員登録委員会の活動を事務局長・フランス・アメリカの委員を含む 4 名で 20 数名分の審査を行った。Expert Member, Associate Member の区分は次第に経験則ができてきたが、Affiliate Member（non-ICOMOS member）の基準で議論があり、今後の課題としている。

(3) 考古学関係者を日本イコモスの会員に迎える活動と、既にイコモスの会員である関係者を ICAHM の Expert Member に登録をすすめる活動を課題として掲げたが、実現できなかった。　（小野　昭）

■Cultural Landscapes（IFLA：杉尾伸太郎、石川幹子、大野渉、本中眞、山田素子）

ICOMOS-IFLA 文化的景観国際学術委員会の 2010 年総会がトルコのイスタンブール工科大学を会場として、2010 年 10 月 4 ～ 6 日の 3 日間にわたって開催された。10 月 7 ～ 8 日はエクスカーションであった。

世界各国から 40 名以上が集まり、日本からは、本委員会杉尾伸太郎副委員長、石川幹子東京大学大学院教授、山田素子プレック研究所文化財保護研究センター研究員の 3 名が出席した。

10 月 4 日（1 日目）は、"Historic Gardens and Parks in and around the Mediterranean" と題して公開シンポジウムを行った。ICOMOS-IFLA 会長である Monica Luengo 氏（スペイン）のイントロダクションに始まり、トルコ、イタリア、フランス等の庭園が紹介された。日本からは、杉尾伸太郎が "Andre Le Notre and Establishment of French Gardens"、石川幹子教授が "Creating Ecological Networks in Tokyo Bay Area. The Role of Historic Gardens and Parks" と題する発表を行った。

10 月 5 日（2 日目）の午前は、ICOMOS-IFLA 総会であった。前会長である Robert de Jong 氏（オランダ）が 10 月 1 日に逝去されたことをうけ、会議の冒頭に参加者全員で黙祷を捧げた後、メンバーの活動状況等が報告された。本委員会は世界遺産候補地の視察等に非常に貢献しているが、desk review や on-site mission の指針が充分でなく、ミッション終了後もそれに対するフィードバックがないことについて、メンバーから不満の声が挙げられた。これに対して、将来的に委員会内でワークショップを開催する等の意見が挙げられた。イコモス本部の今後の活動プログラムとして 2012 年には "Heritage on Rural Site"、2013 年には "Heritage in City and Town"、2014 年には "Heritage in Metropolis/Megalopolis" となることが発表され、本委員会が扱う文化的景観との関連については不透明な点が多いが、今後こうした分野における研究が活発になる見通しである。人事関係に関しては後述している。午後は、メンバーによる自国の庭園の事情について発表があった後、"Historic Parks Charter" の草案について Historic Park の定義や、Charter とする必要があるか等についての議論がされた。

10 月 6 日（3 日目）は、Juliet Ramsay 氏（オーストラリア）、Nora Mitchell 氏（アメリカ）、Nancy Pollock-Ellwand 氏（カナダ）による、"Assessing Aesthetic Values of Landscape for World Heritage" と題したワークショップであった。3 名は昨年日本で開かれた富士山世界遺産推薦についての国際会議に招聘されており、その会議における世界遺産の評価基準（vii）、いわゆる Natural Beauty についての議論が、今回のワークショップ開催の発端となった。自然美をどのように評価するのか。ワークショップでは、まず東洋と西洋の美に関する考え方が発表された後、5 つのグループに分かれて世界遺産である資産の写真を見ながら、何が美しいのか、なぜ美しいのかを話し合い、その結果を全体で報告した。筆者らの所感であるが、美しさの評価は客観性を持たせることが難しく、また評価する人によって感じ方は様々であり、ひとつの基準を設けることが不可能である。ワークショップ主催者からは、今後も自然美についての研究を進めていくという方向性が示された一方で、参加者からは地域や組織の枠組みを超えた議論が必要であろうとの意見もあった。

本委員会が扱う文化的景観という言葉が自然の美しさをも含めた非常に幅広い分野にわたることを改めて認識したとともに、自然美については、本委員会が主体となって調査・研究を進めていくべき課題であることを強く実感した。

10 月 7 日（4 日目）は、イスタンブールの遺産をめぐるエクスカーションであった。はじめにイスタンブール市街地の歴史的発展についての発表があった後、トプカピ宮殿、アヤソフィア、地下宮殿、ブルーモスクを視察した。

10 月 8 日（5 日目）は、ボスポラス海峡沿いにあるドイツ領事館の邸宅やベイレルベイ宮殿等を訪れた。（杉尾伸太郎）

■Cultural Routes（CIIC：杉尾邦江、大野渉）

2010 年 CIIC 総会が、2010 年 11 月 23 日（火）から 28 日（日）までスペイン・マドリッドにおいて開催された。アルゼンチン、イスラエル、イタリア、インド、ウルグアイ、ヴェネズエラ、カナダ、カメ

ルーン、キューバ、ギリシャ、コスタリカ、コロンビア、コートジボワール、スペイン、スリランカ、トーゴ、パレスチナ、ブラジル、ブルガリア、ルーマニア、日本等から、約30名の委員が出席した。日本からは、CIIC ボーティングメンバーである杉尾邦江日本イコモス理事と CIIC アソシエイツメンバーの大野渉が出席した。イコモス副委員長のグオ・チャン氏(中国)もオブザーバーとして参加した。

総会では、①研究発表、②事務的議案、③役員選挙、④日本イコモス国内委員会、CIIC 共同国際研究会、⑤スペイン世界遺産視察等が行われた。

(1) 研究発表

「文化の道の保護についての最近の動向」、「都市計画と土地管理における文化の道の保護」、「最近の世界遺産登録における文化の道登録の方法論」、「ヨーロッパ景観条約とヨーロッパにおける文化の道保護の展望」という 4 つのテーマについて、出席した委員がプレゼンテーションを行い、その後、討議を行うという形で進められた。

杉尾邦江委員は「紀伊山地の霊場と参詣道」の保全について発表し、大野渉委員は、別途期間中に開催された伊勢宣言に関する国際研究会に関連して、平和のための世界遺産に関する伊勢宣言について発表を行った。

各国の委員からは、それぞれの国と関係する文化の道について発表が行われたが、特に、開催国スペインの委員から「サンチャゴ・デ・コンポステーラの道」の付近でダムや工業地域の開発等が地元自治体により進められていることなどが報告され、同資産を危機リストに載せるよう提言する宣言が採択された。

また、今回出席しなかった米（及び豪）の委員から、歴史的な価値を有する道路（Historic Road/Route）についての「憲章」案が、会議開催中に電子メールで委員長宛に届いたことについて報告があり、今後の対応について議論された。その結果、米国委員の関心の対象である「ルート 66」や豪の委員の関心の対象であるアボリジニーの道は、イコモス文化の道憲章が定義する文化の道とは区別して別途議論する必要があることから、サブグループを設置して関心のあるメンバーの参加により今後議論を進めることとなった。

(2) 事務的議案

役員改選に先立ち、現会長を退くマリア・ローザ氏を名誉会長に推薦する事が満場一致で認められた。また新メンバーとして中国から 1 名、韓国から 1 名の計 2 名の加入が認められ、登録会員数は 105 人となった。

(3) 役員改選

CIIC の規定による選挙が実施され、新しい役員が以下のように選出された。会長としてスペインのビクトル・フェルナンデス氏（セヴィリア大学教授、スペインイコモス会員）が選出された。また、日本から杉尾邦江委員（日本イコモス）が副会長（アジア太平洋地域）、大野渉（日本イコモス）が副会長補佐（アジア太平洋地域担当）に選出された。

CIIC 主な新役員

会長：Victor Fernandez Salinas（スペイン）

副会長（アフリカ地域）：Dosso Sindou（コートジボワール）

副会長（アメリカ地域）：Angela Rojas（キューバ）

副会長（アジア・太平洋地域）：杉尾邦江（日本）

事務局長：Sofia Avgerinou-Kolonias （ギリシャ）

(4) スペイン世界遺産「The Monastery and Royal Site of EL Escorial」視察

マドリッド近郊にある世界遺産エル・コスコリアル宮殿兼修道院の巨大建築を視察した。

(5) 第 1 回国際研究会

11 月 25 日に伊勢宣言に基づく初回国際研究会（日本イコモス国内委員会、CIIC 共同研究会）を開催した（第 4 回拡大理事会報告を参照）。　（杉尾邦江）

■Earthen Architectural Heritage（ISCEAH：岡田保良、渡辺邦夫）

・ISC メンバーについてネット会議

・「土プロジェクト 2010」

・Terra 2012 の開催地より "Save the date" のアナウンス（9月3日）

The Pontifical Catholic University of Peru (PUCP) and the International Council on Monuments and Sites (ICOMOS) are pleased to inform the global community interested in earthen architecture that TERRA 2012, the XI International Conference on the Study and Conservation of Earthen Architecture will take place in Lima, Peru, on April 22-27, 2012.　（岡田保良）

■Recording and Documentation（CIPA：高瀬裕、山田修）

「第 5 回文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ」

日時：2010 年 9 月 21 日（火）　10:00 ～ 17:00

場所：パシフィコ横浜・会議センター（3 階）

主催：動体計測研究会（ARIDA）（G 空間 EXPO に連携して開催）

後援：㈳日本写真測量学会、㈳日本測量協会、日本イコモス国内委員会

基調講演（東京大学・池内克史教授）を含む 9 件の発表があり、約 70 名の参加者による活発な議論と情報交換が行われた。　（高瀬　裕）

■Risk Preparedness（ICORP：益田兼房、大窪健之、土岐憲三）

2010 年 2 月の国際選挙により新たに選出された執行部は、ロヒト・ジギャス会長（インド）、スー・コール副会長（英国）、益田兼房セクレタリー（日本）の 3 名である。これまで長く続いた旧執行部では、ディヌ・ブンバル会長（カナダ）、ロビン・リデット秘書（オーストラリア）間の摩擦が大きいこともあって終わることになった。新体制は、グスタボ・アロウズ新会長の下に、第 1 回会議を 9 月 24～26 日に事務局会議を京都の立命館大学歴史都市防災研究センターで開催した。参加者は、執行部を含む世界各地からの 12 名で、学術発表会も行った。アロウズ会長もオブザーバー参加して、新たに数種類の会員資格を設定して、世界中から種々の専門分野にわたる情報を収集するネットワークを形成すること、そのためのネットを副会長が中心になって設置すること、ISCARSAH などの関連 ISC と連携強化すること、ロビン・リデットを財務担当にすること等が決まった。これらの成果は、10 月のダブリンでのイコモス諮問会議にロヒト会長から報告されて、新執行部の設立が広く歓迎された。また、12 月 3 日のペルー・リマでの文化遺産防災国際会議に ICORP も共催して、地震帯における持続可能な歴史都市の保存に関する「文化遺産防災リマ宣言」を採択した。この宣言は、12 月 12～14 日にブータンで開催のユネスコ主催文化遺産防災国際会議でも報告された。ブータン会議は、2009 年 9 月地震を受けて政府が開催したもので、国際機関の支援などを含めたティンプー文書が採択されたが、多くの ICORP メンバーが参加したためにその意見交換会が開催された。ハイチ地震など大規模災害が続発する中で、ICORP の活動が期待されている状況にある。　（益田兼房）

■Stone（ISCS：西浦忠輝、石崎武志）

(1) 国際委員会

現役員（2008.12～ 2011.11）

委員長：Stefan Simon（米）

副委員長：Tamara Anson-Cartwright（加）

事務局長：Jean-Marc Vallet（仏）

財務局長：Andrew A Mcmillan（英）

委員会（Committee）の下に二つの部会（Subcommittee）が置かれている。

・グロッサリー部会

・PGC*部会

* International Conference on the Conservation of Stone in Parks, Gardens and Cemeteries: 2011.6.22-24 パリにて開催（仏歴史記念物研究所との共催）

web site: www.sfiic.fr

西浦忠輝と石崎武志が Scientific Committee のメ

ンバーに入っている。

発表申し込みはすでに締切：西浦忠輝と森井順之がアブストラクト送付済み。

2009～2011　活動結果と計画

1　年報の作成、公開

2　必要な部会の設置

3　各国イコモス委員会へのメンバーの推薦依頼、ならびに委員会が無機多孔質建築材料（レンガなど）も対象とすることの告知

4　メンバーリストの更新と確認

5　グロッサリー（石の劣化パターン）の提供

2008 年 11 月にグロッサリー（英－仏版）がウェブ上に公開されてから、2010 年 11 月までのダウンロード数は 20000 件以上に達した。

6　メンバーが各国のイコモス委員会を通じて、グロッサリーを広く活用するべく奨励

7　グロッサリーの多国語訳に向けて、各国メンバーへの依頼と、財政的支援の検討

ドイツ語訳は完成。イタリア語、スペイン語、日本語、ギリシャ語が作業に入っており、その他中国語、韓国語等も準備に入っているとの情報。

8　ウェブサイトの充実

9　委員会の開催

2010 年 1 月 15、16 日にドイツのドレスデンで、12 月 4 日にヨルダンのペトラで開催された。次回は 2011 年 6 月のパリでのシンポジウムの際に開催の予定。

10　他の委員会との連携を推進

11　ICCROM の研修事業（石の保存のベニスコース等）への協力関係の構築

12　ICOM-cc の石の委員会との協力関係構築の可能性を探る

13　伝統石工技術、保存技術の調査の検討

14　石の伝統的使用方法と保存方法の調査の検討

15　イコモスの世界遺産作業部会への協力

16　第 17 回イコモス総会（2011）への協力

(2) 国内委員会

2010 年 2 月に ISCS 委員長の Stefan Simon 氏が、東京文化財研究所の招聘で来日した際に、国内のメンバーが集まり研究会と意見交換を行った。その中で、グロッサリーの日本語訳の作成計画について話し合われ、本部と緊密な連絡を取りながら、協力して進めることが確認された。

2010 年 10 月 4 日に正式に国内委員会が発足し、活動を開始した。

委員長　西浦忠輝（国士舘大学）

副委員長　石崎武志（東京文化財研究所）

顧　問　沢田正昭（国士舘大学）

委　員　友田正彦（東京文化財研究所）、山内奈美子（文化財保存計画協会）、森井順之（東京文化財研究所）、張大石（東北芸術工科大学）、赤澤泰（文化財保存計画協会）、三宅理一（藤女子大学）、松倉信祐（三桜一級建築士事務所）

最初の事業として、「グロッサリー（石の劣化パターン）」の日本語訳を行うための作業チームを発足させ、作業を開始した。

石の劣化用語集作成ワーキンググループ

リーダー　石崎武志

副リーダー　山内奈美子

メンバー　友田正彦、森井順之、張大石、赤澤泰、脇谷草一郎（奈良文化財研究所）

サブメンバー　谷口陽子（筑波大学）、小泉圭吾（大阪大学）、高見雅三（北海道立総合研究機構）、千葉麻由子（早稲田大学）、朴東熙（国士舘大学）

基本的翻訳作業は一応終え、内容チェック、用語、表現の統一、様式の統一等の作業に入るところであり、2011 年 3 月までに原稿を完成する予定である。尚、翻訳作業にはワーキンググループメンバーに加えて、国内委員会メンバーの西浦が参加した。（西浦忠輝）

■Theory and Philosophy of Conservation and Restoration（ISCTC：秋枝ユミイザベル、西村幸夫）

2010 年 5 月 6～9 日、チェコ・プラハでの会議に参加し、論文を発表した。アロウズ会長の提唱した Tolerance for Change に対して、欧州を中心に意見・異論が多く出されていた。2011 年 3 月にイタリア・フィレンツェで会議が開催される予定であるので、

積極的に論文投稿いただくようお願いしたい。

（西村幸夫）

■Vernacular Architecture（CIAV：前野まさる、大野敏）

2010年次CIAV会議は5月31日から6月6日まで、「国境をまたぐ民家」と題し、スウェーデン国境に近いノルウェーのコングスヴィンゲルで開催された。会議には参加できなかったが、委員長 Marc de Craffe より情報が送られてきた。それによると、研究会では、ノルウェー・スウェーデン国境地域に広がるフィンランド移民のもたらした校倉造や縦羽目の木造建築の比較研究が行われた。2日には実際にコングスヴィンゲル周辺の民家事例の視察も行った。また、スウェーデンの民家の中には玄関庇周りを飾ったものや室内に壁画を描いたものもあり、地域差があることも紹介された。4日午後からポストツアーが行われ、ノルウェー中部スウェーデン国境近くの鉱山町レーロス（世界遺産）からフィンランドまで回る旅であった。参加者は 60 名余り。2011 年の CIAV 会議はパリで開催される予定である。

（前野まさる）

■Wood（ICC：渡邊保弘、土本俊和）

2010 年は会議の開催がなく、当初から 2011 年 2 月にエジプトで開催の予定であった。現在は会議の開催日程が更に 2011 年 5 月 9 ～ 14 日に延期となる旨の報告を受けている（会議詳細未定）。この会議はシナイ半島の修道院（St.Katherine Monastery）に現存する最古の木造トラス（6 世紀：修理中）の視察が一つの目的で非常に興味深いもの。

2009 年の 12 月に Poland の Wroclaw で合同開催された会議のレポートが ICOMOS のウェブサイトに掲載された。また年頭には、委員会の活性化を計るためにメンバーの再構成が計画された。現在委員会に登録されているメンバーに継続して活動する意思を確認する作業に事務局が8月に着手した。また、5 月には用語集の編纂に向けて各国委員に英語に対する自国語訳の提出が求められ 7 月に訳語を提出した。

（渡邊保弘）

■Rock Art（CAR：小川勝、五十嵐ジャンヌ）

7月	北海道余市町にて 11 月開催の国際研究集会の打ち合わせ(5 名参加)
9月6～11日	フランスにおける国際研究集会において研究発表(小川・五十嵐)
9月11～25日	スペイン・フランスにおける現地調査（8 名参加）
10月26、27日	韓国における国際研究集会において研究発表（小川）
11月7日	余市町における国際シンポジウム開催（約 200 名参加）
11日	京都市における洞窟壁画講演会開催（約 50 名参加）
13日	東京都新宿区における国際ワークショップ開催（約 50 名参加）

（小川　勝）

6. 2010 年次各小委員会報告

■憲章：第 3 小委員会（主査：藤井恵介）

2010 年 2 月 / 3 月、研究会を開催し、2000 年以降の国際動向を把握した。

（藤井恵介）

■鞆の浦の問題：第 6 小委員会（主査：益田兼房）

2009 年広島地裁での港湾埋め立て行政訴訟判決は、景観保全の原告適格の範囲や景観の価値等に関して画期的な内容のものであった。日本イコモス国内委員会は、裁判に直接関わる立場ではないが、鞆の浦の保存が、国際イコモス総会において 2005 年西安・2008 年ケベックの 2 回連続して議決されたことを受け、小委員会として学術的な調査研究結果を HP を通じて公表してきたところである。判決文を読むと、結果的にはその成果が大きな貢献をしたことが判明している。しかし直後に広島県が高裁に控訴し、また知事選挙で知事が交替して地元住民協議会を開催するなどの経過を経て、訴訟は現在凍結状態となっ

ている。今年度は、この協議会の行方を見守るために動きが停止しつつも、次年度に向けて県や国の行政で関連する文化財保護や建設の方向がどう動くか、予断を許さない状況が続いている。　（益田兼房）

■白川郷・五箇山地区交通問題等：第7小委員会
（主査：西村幸夫）

モニタリングが開始され、また交通問題など個々の問題でそれぞれ進展がみられた。小委員会のメンバーも計画立案に参加して、全体的なマスタープランが策定され、村民に公開されている。（西村幸夫）

■朝鮮通信使遺産：第9小委員会（主査：三宅理一）

国内において、2度の研究会を開催した。また韓国の関係者と連絡し、2011年の研究会について調整している。　（三宅理一）

■歴史都市のマスタープラン：第11小委員会
（主査：岡田保良）

2011年9月25日から10月1日まで東京で開催されるUIA2011東京大会に関連して、各国の学生を対象にしたコンペ課題に、茨城県霞ヶ浦周辺の広域都市圏がとりあげられることになった。この催しにあわせて、研究会などを企画したい。（佐々波秀彦）

■技術遺産：第12小委員会（主査：伊東　孝）

本小委員会としては、未だ正式な委員会を開催していないが、関係委員は、以下のようなシンポジウムや勉強会で、問題や課題を整理している段階です。

(1) 11月14日　岩国市での国際シンポジウム

今回のテーマは、錦帯橋の唯一性がテーマだったので、技術遺産という面では内容が煮詰まらなかった。むしろ一昨年の第一回の方が、「錦帯橋の真実性について」だったので、いろいろな論点が出された。

小委員会の課題としては、第一回のシンポの記録の読み直しとその後の意見のやり取りをふまえて、問題や課題を整理する必要がある。

(2) 12月12日　勉強会

近代化遺産、産業遺産、近代化産業遺産、技術遺産など、「遺産」をめぐる言葉・概念がいろいろある。
・技術遺産、産業遺産の保存とは、どういうことか。
・技術遺産、産業遺産の利用とは、どういうことか。
・稼動施設をどう扱うか。

日本だけでなく、各国の規約を集めて、まずは整理しようという段階。　（伊東　孝）

7. その他

1）Cultural Heritage Monitoring Networkへの参加

イコモス本部の新プロジェクトCultural Heritage Monitoring Networkに参加し、4通のレポートを本部に提出した。このプロジェクトは、世界文化遺産、世界遺産暫定リスト上の文化遺産に関し、保存状況、課題等を各国内委員会が本部に報告することで、より包括的に世界の文化遺産が瀕している危機を把握し、その危機に取り組もうとするものである。日本イコモスでは第2回拡大理事会にて対象とするサイト、担当者を決め、各担当者は第3回拡大理事会にて報告を行った。
・姫路城（担当：八木雅夫）
・古都京都（担当：濱崎一志・宗田好史）
・広島原爆ドーム（担当：前野まさる・矢野和之）
・白川郷・五箇山（西村幸夫・西山徳明・久保田尚）

2）Joint ICOMOS-TICCIH Guidelinesへの意見提出

TICCIH（国際産業遺産保存委員会）との合同で、"Joint ICOMOS TICCIH Guidelines for the Conservation of Industrial Heritage Sites"の策定が進められており、各国内委員会へは当該ガイドライン草案への意見照会が行われた。日本イコモスでは、会員数名にコメントを依頼し、赤澤泰、中山俊介、松浦利隆の三氏よりご意見をいただいた。それら意見を土台として、第3回拡大理事会での審議を経て、日本イコモスとして見解をまとめ、本部へ提出した。

3）2011年イコモス本部総会（パリ）について

現在、予定されているテーマ、日程は以下の通り。

論文投稿の詳細等については、わかり次第、アナウンスする。

テーマ："Heritage : Driver of Development"

日程　：11月25（金）～12月3日（土）

11.25　本部執行委員会

11.26　午前：諮問委員会、午後：学術カウンシル

11.27　午前：総会開会・本部執行委員会、
　　午後：諮問委員会、夜：レセプション

11.28　午前：総会・開会セレモニー、
　　午後：学術シンポジウム、夜：地域別会合

11.29　学術シンポジウム

11.30　午前：学術シンポジウム、
　　午後：総会・選挙、夜：ISCイベント

12.1　午前：総会・決議、午後：閉会セレモニー、
　　夜：ガゾーラ賞レセプション

12.2　イコモスの新オフィス見学

12.3　午前：新執行部による委員会、ポストカンフェランスツアー

4）世界遺産条約40周年記念イベントについて

2012年11月16日、世界遺産条約40周年の記念イベントが日本で開催される。近々、そのための委員会が文化庁内に立ち上げられる予定だが、日本イコモスとしても、組織としてこのイベントに協力していく方針で、今後、提案やサポート等を行っていく。

5）法人化について

法人化（一般財団法人）についての委員が決定したが、定款と現会則とのすり合わせがまだできていない状態である。今後このすり合わせを行うとともに、財団法人化した時の会計規則などをよく検討する必要がある。来期はスケジューリングをきちんと行って実現に向けて準備したい。

1. 2011年次活動計画

■広報担当（山田幸正・苅谷勇雅）

2011年次においても、これまで通り、事務局とともにJAPAN ICOMOS INFORMATION誌を年4回程度、定期的に発行し、総会や理事会の報告、国内委員会が主催・後援する研究会、講演会、シンポジウムなどを中心に、その告知や報告、さらには事務局の会務記録などを、会員諸氏にお伝えしていきたいと考えている。とくに、2011年12月にフランス・パリでのICOMOS総会が予定されており、このイベントを中心に、文化遺産やその保存をめぐる活発で多様な話題が掲載できるものと期待している。また、日本イコモス国内委員会のホームページについても、できるだけ情報のアップデイトを心がけたいと考えている。これからも、ひろく会員の皆さんのご理解とご協力をいただきながら、広報活動を展開していきたい。（山田幸正）

■事業担当（杉尾邦江・清水真一）

平成22年度東京倶楽部助成事業「CIIC・日本イコモス国内委員会共同国際研究会」

(1) 今後の研究会の進め方について

・サブテーマの1及び2については、国内研究会でブレインストーミングを続ける。

・第1回国際研究会では、国内研究会での議論の結果について説明し、国際研究会の進め方について意見を聞く。その結果を国内研究会に報告するが、必ずしも国内研究会と国際研究会で全く同じ形で行う必要はない。それぞれの方法で研究会を進め、最終段階で統合し合同発表、議論する機会を設ける。

・Facebookのようなサービスを利用して、国内委員会メンバーと国際委員会メンバーで意見交換できる

と更に良い。どのような方法が適切か今後検討することとする。

(2) 今後の予定

第 3 回国内研究会は 2011 年 2 月 4 日（金）に開催予定。（杉尾邦江）

2. 2011 年次各国際学術委員会（ISC）活動方針

■Analysis and Restoration of Structures of Architectural Heritage

(ISCARSAH:花里利一、岩崎好規、坂本功、西澤英和)

2011 年の委員会は、5 月にキューバで地震とハリケーンを主題として開催される予定である。耐震対策のみならず、風水害対策も本委員会においてより大きく取り扱っていくことになろう。キューバ会議の開催に向けたＷＧのメンバー（花里）として活動を行う予定である。さらに、2010 年 11 月 20 日には、法華経寺（千葉県市川市）において、国際セミナー『五重塔はなぜ倒れないか？ギリシャ神殿はなぜ倒れないか？』を法華経寺、三重大学、日本イコモスの共催として開催した。同セミナーには、定員 100 名を超える参加者があり、ギリシャ人専門家の講演もあり、熱心な討議も行われた。2011 年は国内の委員会登録メンバーとの情報交換をより積極的に行いたいと考えている。（花里利一）

■Archaeological Heritage Management

(ICAHM：岸本雅敏、小野昭)

(1) 考古学関係者を日本イコモスの会員に迎える活動は、具体的に対象を絞って行う。既にイコモスの会員である関係者を ICAHM の Expert Member に登録をすすめる活動を進めるが、あわせて Associate Member として参加できそうな会員への働きかけも行う予定である。考古学関係の若い研究者、特に大学院生の関心を ICAHM にむけるにはいくつもの困難がある。そのための調査と分析も課題である。

(2) ICAHM は 2010 年から簡単なニューズレターを E-mail で発信することを始めた。日本イコモスの ICAHM 担当からも情報発信することを活動方針の一つに加えたい。（小野　昭）

■Cultural Landscapes（IFLA：杉尾伸太郎、石川幹子、大野渉、本中貞、山田素子）

2011 年の総会は、11 月にフランス・フォンテーヌブローで開催されるイコモス総会にあわせて開催される予定である。（杉尾伸太郎）

■Cultural Routes（CIIC：杉尾邦江、大野渉）

次回 CIIC 総会は本部総会時に行い、その他の活動については役員改選があったため、今後新役員の合議により活動計画の検討を行うことになる見通しである。（杉尾邦江）

■Recording and Documentation（CIPA：山田修）

第 23 回 CIPA 国際シンポジウム

(XIII International CIPA Symposium)

日時：2011 年 9 月 12～16 日

場所：プラハ（チェコ）

■Risk Preparedness（ICORP:益田兼房、大窪健之、土岐憲三）

引き続き会員の拡大とネットワーク形成を推進し、国際的な大災害への対応力を強めるべく、6 月にフィンランドでの委員会が予定されている。

（益田兼房）

■Stone（ISCS：西浦忠輝、石崎武志）

2011 年 6 月のパリでの国際シンポジウム (International Conference on the Conservation of Stone in Parks, Gardens and Cemeteries) および並行して開かれる ISCS 委員会にできるだけ多くのメンバーが参加するよう努めたい。（西浦忠輝）

■Vernacular Architecture（CIAV：山田幸正、大野敏）

2011 年次から、Voting member を前野まさるか

ら山田幸正に交代する。

■Wood（ICC：渡邊保弘、土本俊和）

2011年5月エジプトで開かれる会議は、現存最古の木造トラスを視察出来る数少ない機会であり広く国内委員の参加を求めたい（木の委員会の委員でなくとも参加可）。また、"the SHATIS' 11 Conference：International conference on structural health assessment of timber structures" と題した国際会議が2011年6月16～17日にPortugalのLisbonで開催される（LNEC, IICT等主催、ICOMOS, IIWC, ISCARSAH等多数協賛:Website参照の事）。

木の委員会では今後より充実した活動を行うため意欲的なメンバーの参加を求めていく。その為日本国内会委員からも積極的に参加されるメンバーを募って行きたい。さらには日本の保存修理の理解を深めるための日本国内での木の委員会の会議開催に向けて、テーマや視察候補地等を考えて行きたい。

（渡邊保弘）

■Rock Art（CAR：小川勝、五十嵐ジャンヌ）

・台湾における現地調査（参加者数・期日等未定）

・アメリカ合衆国における現地調査（参加者数・期日等未定）

（小川　勝）

3. 2011年次各小委員会活動方針

■憲章：第3小委員会（主査：藤井恵介）

継続的に研究会を実施する。2000年以降の国際動向を把握し、日本憲章を検討する。　（藤井恵介）

■世界遺産小委員会:第4小委員会（主査:稲葉信子）

・現在世界遺産委員会で進行している条約の将来について考える作業の情報共有と、日本イコモスとしての意見集約を、2011年度の研究課題とする。

・日本は2012年11月に40周年事業の最終イベントを招致することが決まっている。日本イコモスとして、これにどのように参画していくか、西村委員長とも相談の上、委員会で協力できることはしていきたい。　（稲葉信子）

■鞆の浦の問題：第6小委員会（主査：益田兼房）

2011年度の活動方針としては、状況に応じての臨機応変の対応が必要となろう。　（益田兼房）

■歴史的建造物における塗装修理の手法：第10小委員会（主査：窪寺　茂）

当小委員会では、将来に向けた日本の塗装修理の方向付けや原理原則を検討することを活動の中心に据えている。2011年度の活動は、日本におけるこれまでの塗装修理の実際を把握して、修理方針の類型化を図るとともに、文化財保存修理事業における彩色修理の実際に対する建造物所有者の意見や思いを聴取して、その結果を今後の活動の基本情報とするために、整理・分類して行きたいと考えている。

（矢野和之）

■技術遺産：第12小委員会（主査：伊東　孝）

(1) 会の連絡体制の確立と正式な第1回会議の立上げ
　＊ICOMOSに入会してないメンバー候補もいる。

(2) 規約の整理と、「技術遺産」「産業遺産」の概念整理

(3) それらの「保存」「利用」の検討と整理（伊東　孝）

4. 2011年次予算案

相変わらず資金状況の厳しい中、研究費助成を小委員会、ISC、研究機関などで受けていただき活動が活発化することを願っている。東京倶楽部からの助成金は、2010年より継続している。また、昨今の社会情勢の中、維持会員の開拓が難しいが、今回地方公共団体（佐渡市）に入会していただいた。世界遺産（暫定登録を含む）を有している公共団体や世界遺産を目指している公共団体などに働きかけていくことで、新たな形が見えてくると考えている。

日本イコモス国内委員会　2011年次予算

(2010/12/18～2011/11/30まで)

(1) 繰越金	5,806,483円
(2) 収　入	
2011年分会員会費	3,800,000円
未納分会員会費	1,030,000円
維持会員会費	850,000円
助成金	0円
事業費等収入	0円
雑収入	0円
寄付金	300,000円
普通預金利息	1,000円
定期預金利息	1,000円
運用益	1,000,000円
合　　計	6,982,000円

(3) 支　出	
ICOMOS本部負担金	1,800,000円
会議費	300,000円
研究費	2,400,000円
渡航費補助	0円
INFORMATION誌　編集・印刷費	1,200,000円
通信費	350,000円
事務用品費	100,000円
事務局人件費（交通費を含む）	1,000,000円
事業費	0円
法人化準備費	200,000円
合　　計	7,350,000円

(4) 収　支（収入－支出）	－368,000円
(5) 2012年度への繰越金	5,438,483円

質疑応答／承認

以下のような質問、意見が会場から出され、それぞれ回答があった。

■東京倶楽部からの助成金について

CIICとの共同事業に対する東京倶楽部からの助成金が一般会計に組み込まれているが、これは是正すべきではないか。そうした経理がもし赤字になった場合、その処理に一般会計が使われるべきではない。はっきりとした目的をもった助成金や寄付金については、「特別会計」とすべきである。

これに対して、来年次より「特別会計」として処理するようにしたい、との矢野事務局長からの答弁があった。

■ICOMOS本部や外国からの文書に対する翻訳・訳語について

国際条約の条文などは定訳があるが、本部などからの文書を日本語訳する場合、さまざまな問題が生じているので、そうした問題に対応した委員会などを立ち上げてはどうか。

これに対して、本総会に先立って開催された第4回拡大理事会においても同様な問題が話し合われた。今後、理事会等で検討していく、との回答が矢野事務局長よりなされた。

■法人化の問題について

一般財団法人をめざして検討中とのことだが、「社団」も検討すべきではないか。法人化されると、会計上、「寄付金」などを使い切ることが求められるのではないか。

法人化にともなって発生するさまざまな問題について、河野副会長などとも相談しながら、鋭意検討を進めたい、との回答が矢野事務局長からなされた。

■ICOMOSカードの特典について

ICOMOSカードの特典について成文化されているのか。

これに対して、特典については成文化されていない、との回答が岸本理事よりなされた。

以上、2010年次一般報告、2010年次会計報告、2010年次会計監査報告、2011年次活動計画、2011年次予算案が、一括して承認され、日本イコモス国内委員会2010年次総会は閉会した。（記録：山田幸正）

日本イコモス国内委員会研究会「産業遺産の世界遺産登録」報告

日本イコモス国内委員会2010年次総会に引き続き、研究会「産業遺産の世界遺産登録」が、2010年12月18日（土）午後4時から午後6時まで、東京文化財研究所地下1階セミナー室において開催された。パネラーとして、「石見銀山遺跡とその文化的景観」から島根県大田市の大國晴雄氏、「富岡製糸場と絹産業遺産群」から群馬県の松浦利隆氏、「金を中心とする佐渡鉱山の遺跡群」から新潟県の小田由美子氏、「九州山口の近代化遺産群」から同世界遺産登録推進協議会コーディネーターの加藤康子氏にそれぞれ参加いただいた。なお、全体の司会コーディネーターは宗田好史理事が務めた。

まず、それぞれに4つのサイトから、これまでの取組み状況や課題などが報告された。2007年7月、アジア初の鉱山遺跡として世界遺産登録された石見銀山遺跡では、本年8月の世界遺産委員会において登録範囲の拡大（軽微な変更）が承認されたこと、また登録当初の数に比べれば減少したものの、観光客数はそれなりに安定しているとみているが、今後の推移を注視していることなどが報告された。富岡製糸場関連からは、絹産業を「養蚕」「製糸」「織物」「流通」の4分野にわけ、それぞれの構成遺産の価値付けを行っており、登録申請にむけた作業が着実に進んでいることなどが述べられた。佐渡鉱山遺跡からは、本年秋に暫定リスト記載が決定され、県学術委員会を立ち上げたばかりで、登録申請にむけた取組みが本格化したところであること、また4つの金銀鉱山地区を中心に、構成資産のリスト化や保存整備のための施策整備に取りかかっていることなどが報告された。九州山口の遺産群からは、我が国の文化財保護法に基づく文化財指定と保存の手法はそのまま産業遺産、とくに現在、さらには将来にわたって使われ続けることになる遺産には適用しにくい面があることなどが指摘された。

会場からは、鉱山掘削の技術や地質的な特徴などが明確化されているのか、観光客の増大、マスツーリズムへの対応はどのようになっているのか、近代化の時期が明確化されているのか、現状を保持し追体験できることにも意味があるのではないか、稼働している資産を今後、どのようにして「保存」すればよいのか、などさまざまな質問や意見が出され、活発な議論が行われた。最後に、暫定リスト記載のサイトごとに、登録申請にむけたロードマップの概要が述べられた。

（記録：事務局）

研究会：パネラーの方々

研究会：会場内の様子

●国際セミナー報告
「五重塔はなぜ倒れないか。ギリシャ神殿はなぜ倒れないか」
—法華経寺五重塔での世界初の耐震性観測—

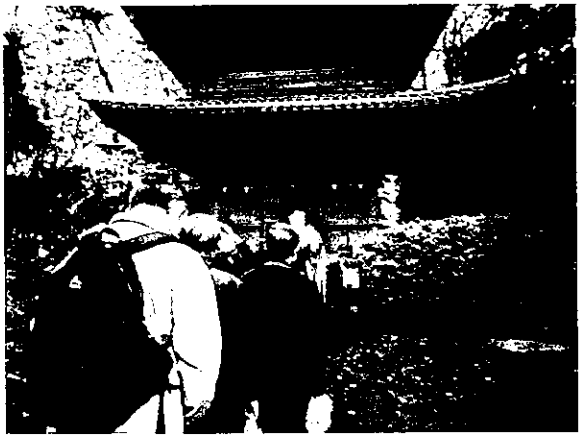
山田幸正

本国際セミナーは、ISCARSAH（建築遺産の構造解析と修復に関する国際学術委員会）の委員である花里利一氏より 2010 年次第 2 回拡大理事会において企画案が提案され、日本イコモス国内委員会が法華経寺および三重大学と共催して実施することが承認されたものである。筆者は建築構造の専門家ではないが、テーマがとても刺激的で面白さを感じただけでなく、日蓮上人ゆかりの古刹でどのような国際セミナーが開催されるのだろうか、という妙な好奇心も手伝って参加を申し込んだ。参加の電話をお寺の事務局にした時、すでにかなり満員の状態であったようで、予約が断られそうになった。すかさず、主催者であるイコモス国内委員会の名を出して、ようやく参加させていただけた。そのような経緯から、あまり専門的な報告はできないが、このセミナーの報告を本誌に投稿することとなった。

2010 年 11 月 20 日（土）12 時半、千葉県市川市の法華経寺本院（大客殿）の大広間には、100 人以上の参加者が集まっていた。3 つほどの座敷の襖を取り払った広間は、正面においたスクリーンがやや遠いようにも感じるほどの奥行きで、参加者は座布団に座る形で講演を聞いた。前方のほうには構造関係の専門家も多く来られていたようであるが、市民をはじめ一般の方がかなりの数参加されているのに驚いた。

中山法華経寺貫首および市川市教育委員会の挨拶に始まり、前半はギリシャからの専門家からの報告が続いた。まず、ギリシャ文化省のアンドロウニキ・ミルティアドウ氏は、「ギリシャ世界遺産の保存と修復」と題して、近年の地震で被災したビザンチン教会堂の修理事業とモニタリングを中心に報告され、次にアテネ工科大学のハリス・モウザキス氏は、「パルテノン神殿の耐震性」ということで、積層された

法華経寺本院（大客殿）大広間での講演会・報告会の様子


法華経寺五重塔初層内部見学会の様子

石柱ドラムの振動台実験からのコンピュータ数値解析について報告された。3 人目に予定されていたアクロポリス修復事務所長であるマリア・イオアンニドウ氏は、修復工事の関係で来日することができず、代わりにパルテノン神殿の修復工事の様子などの映像が写し出され、花里氏らの補足的な解説が加えられた。

休憩をはさんで後半は 3 名の日本人研究者の発表であった。まず、三重大学の花里利一氏は、自らの研究の経緯をたどりながら、構造補強においては、地震特性を踏まえて、個々の建物の構造的な特性を正しく理解することがまずは肝要であること、またその建物がもともと持っている耐震的な長所をできるだけ活かすようなきめの細かい補強法を考案していくことが大切であると説いた。次に、防災科研の箕輪親宏氏からは、1622 年建設の国指定重要文化財・

法華経寺五重塔を対象に実施されている常時微動測定の解析結果について、地震力だけでなく、風力による五重塔の変位の状況なども詳細に報告された。最後に、東京藝大の日塔和彦氏からは、法華経寺の文化財建造物、とくに祖師堂の復原保存工事に関連して、発掘調査による創建当初の仏堂、前身建物などの復原考察などが報告された。内容的には非常に濃いもので、一般の参加者の方には理解するのがたいへんではなかったかと思われるほどであったが、最後まで熱心に聴講されていたのが印象的であった。

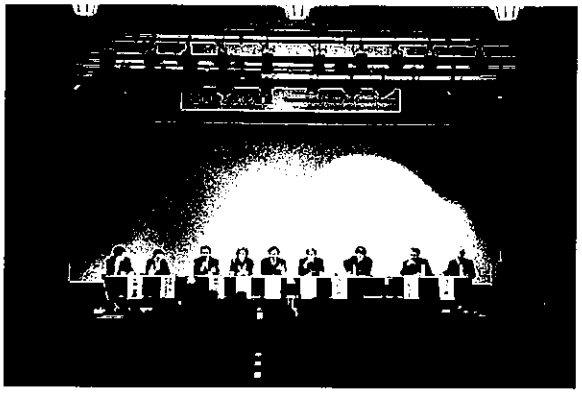
大広間での講演・報告の後、重要文化財である五重塔の内部見学が行われた。午後4時を過ぎて、やや日が傾きだしたが、多くの方が順番に初層内部の見学に参加されていた。

前野まさる　画

第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「『復興』と文化遺産」開催報告

友田正彦

東京文化財研究所主催による上記シンポジウムが1月19日～21日、東京国立博物館平成館にて開催された。「『復興』と文化遺産」を標題とした今回は、自然災害、紛争、社会変化というそれぞれの状況を背景として、社会の復興あるいは変革過程において文化遺産がいかなる位置付けを与えられ、保存や修復、再建といった文化遺産をめぐる出来事が社会全体に対してどのような効果をもたらしてきたか、について論じることが主題であった。そして文化遺産保護に関する国際協力はいかにあるべきかについても議論の視野に入れたいというのが主催者の意図であった。基調講演に続いて、上記の背景状況ごとに計3セッションを設け、最後に総合討議が行われた。伊・中・日における震災復興と文化遺産、紛争からの国家再建過程をめぐるアフガン・ボスニアからの報告、カンボジアの無形遺産、旧東独・ロシア・ブータン・日本での文化遺産をめぐる状況など、それぞれに興味深い報告が続いた。討議の中では、文化遺産の価値付けや意味性が固定的なものではありえないこと、人々の生活との関わりにおいて何が復興されるべき文化遺産であるか、また再建や復元における倫理感にも話題が及んだ。



総合討議の様子

基調講演者の一人である前イクロム事務局長のニコラス・スタンリープライス氏にシンポジウムの感想等を伺った。

・テーマについて

災害後の社会復興に関する会議等で文化遺産が一要素として取り上げられることはあるが、文化遺産サイドから議題にした例は少ないと思う。今後さらに考察されるべきテーマであろう。社会科学や文化人類学といった分野のスピーカーが加わったことで内容に厚みが出たと思う。

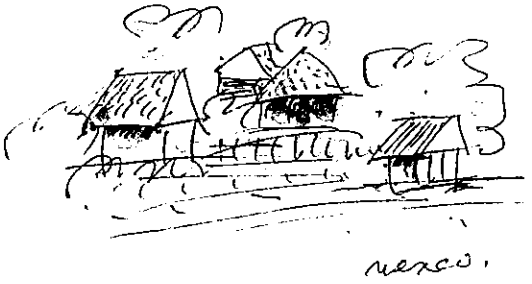
・国際機関の役割

復興においても社会変化においても国際機関が文化遺産保護に十分な役割を果たしていないという批判がある。確かに失敗例も多いが、成功例は正当に評価すべきと思う。逆に、モスタルのように成功例と思われている中にも多くの課題があるのは事実だ。

・会議成果と日本への期待

各々が抱えている経験や課題を共有する機会として大いに有益であった。過去の多くの事例に学ぶ(learn from experience) このような場を今後さらに設けていくべきだと思う。会場との質疑も含め、もう少し議論ができればさらに良かった。

例えば地震後の復興に関する日本の経験への期待は大きい。そのような経験や対策をいかに海外と共有できるかが国際貢献のポイントであろう。



前野まさる　画

イコモス会員カードの提示による姫路城縦覧料等の不徴収について

崎谷康文

平成 22 年 11 月 1 日から姫路城を縦覧するとき、イコモス会員カードの交付を受けた者は、会員カードを提示し、確認を受ければ、無料で入場し見学ができる。

世界遺産でもある国宝姫路城は、姫路市が管理団体であり、姫路市は、姫路城縦覧料等徴収条例（昭和 39 年 4 月 1 日条例第 30 号）に基づき、大人（満 15 歳以上）は 600 円、子ども（満 5 歳以上満 15 歳未満。ただし、中学 3 年生を含む）は 200 円の縦覧料を徴収している（同条例第 2 条）。ただし、後に述べるように、平成 22 年 4 月 12 日から平成 27 年 3 月 31 日までの間は引き下げ措置がある。

条例第 3 条では、特別の催し物を行う場合には、観覧料を徴収することがあると規定している。この条例第 6 条は、①満 5 歳未満の者、②優待登閣券の所持者及び③その他市長が特に指定したものについては、縦覧料等は徴収しないと規定している。

この条例第 6 条第 3 号の規定に基づき縦覧料等を徴収しないものとして市長が特に指定するものについて定める「姫路城縦覧料等不徴収取扱要綱」が改訂され、これまで指定されていた、身体障害者、市内の小・中・特別支援学校が学校行事として縦覧するときの児童生徒と引率教員、市内居住の 65 歳以上の者などに加え、新たに、「国際記念物遺跡会議が交付する国際記念物遺跡会議会員カードの交付を受けた者」が縦覧料等を徴収しないものとして指定された。この規定は、平成 22 年 11 月 1 日から施行されている。

姫路城は、昭和の大修理と呼ばれる大天守の解体修理から約半世紀が過ぎており、大天守の漆喰や瓦に剥離などの痛みが目立ってきた。そこで、8 万枚を超える瓦の全面葺き替え、屋根の目地漆喰の全面修復、壁面漆喰の修復、耐震性向上のための構造補

強などの保存修理工事を行うことが決定され、平成21年10月から着工されている。工事は、平成26年度末に完了する予定であり、平成23年3月からおよそ3年間は大天守を素屋根で覆うこととなる。この素屋根は、工事用であると同時に、内部から大天守の漆喰壁の塗装や屋根がわらの葺き直しの状況を間近に見学できる空間を設けている。この見学用スペースは、素屋根の7階と8階に設けられて、エレベーターを利用して車いすの使用者なども姫路城見学が可能になっている。この姫路城大天守修理見学施設は、「天空の白鷺」と名付けられ、見学料金は、大人200円、子ども(満5歳以上満15歳未満。ただし、中学3年生を含む)100円である。

今回の修理は、解体修理ではなく、大天守の屋根と外壁の修理であるから、工事の状況によっては不便もあるが、相当の期間、大天守に登ることを含め、西の丸などの広い姫路城の区域の見学はこれまで同様に可能である。むしろ、大天守の内と外から同時に見学できるまたとない機会である。

既に、条例が改訂され、姫路城大天守保存修理事業の実施に伴い、城内の縦覧を制限することとなる平成22年4月12日から平成27年3月31日までの間における縦覧料の額を引き下げ、15歳以上の者は400円、5歳以上15歳未満の者は100円とすることとなっている。

私は、姫路市の出身であり、姫路城大天守保存修理検討会の副会長でもあることから、イコモス会員に対し世界遺産である姫路城の見学について便宜が図られることは、姫路城のすばらしさを広く内外に伝えるためにも有効であることを姫路市長や市の姫路城担当者に説明しお願いしたが、迅速な対処を行われた姫路市の明快な判断に心から感謝している。

博物館やその他の世界遺産などについても、入場料等の徴収に関する規程があり、それに基づき具体的な定めを設けることで、徴収の対象外とすることができると考える。もちろん、それには、管理者がその必要性を理解し判断することが前提であって、そのための働きかけが適切に行われることを期待する。

以下に、条例と要綱の抜粋を示す。

姫路城縦覧料等徴収条例(昭和39年4月1日条例第30号)(抄)

(縦覧料)

第2条　姫路城を縦覧しようとするものは、次に掲げる縦覧料(消費税及び地方消費税相当額を含む。以下同じ)を納付しなければならない。

(1)　大人(満15歳以上)　1人　1回　600円

(2)　小人(満5歳以上満15歳未満。ただし、中学3年生を含む)　1人　1回　200円

(観覧料)

第3条　市が姫路城において特別の催物を行う場合は、第2条の縦覧料のほかに観覧料を徴収することがある。この場合において観覧料の額は、その都度市長が別に定める。

(縦覧料の減額等)

第5条　縦覧料は、次の各号に該当する場合は、それぞれ当該各号に定める範囲内において減額することができる。

(1)　団体30人以上100人未満　1割引

(2)　団体100人以上300人未満　2割引

(3)　団体300人以上　3割引

(4)　その他市長が特に必要と認める場合　規則で定める額

姫路城縦覧料等不徴収取扱要綱(抄)

第2条　条例第6条第3号に規定する市長が特に指定したものは、次に掲げるものとする。

(9) 国際記念物遺跡会議が交付する国際記念物遺跡会議会員カードの交付を受けた者

第3条　姫路城管理事務所の管理者は、前条各号のいずれかに該当する者(同伴介護者を除く)が縦覧料等の不徴収の取扱いを希望するときは、その者が交付を受けた手帳、カード、身分証明書等を提示させ、当該各号に規定する者であることを確認しなければならない。

自著を語る

上野邦一著

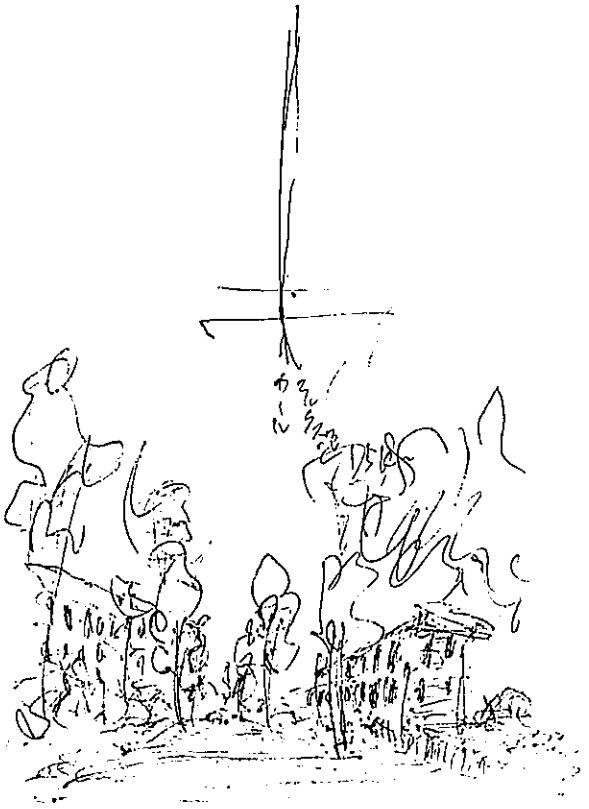
『建物の痕跡をさぐる：妻籠、大和の古代寺院、アンコール・ワット』

連合出版（2010/09/20 出版）ISBN：9784897722566

建物や遺跡には、過去の来歴を示す痕跡が多数ある。表面にあったり側面にあったり、普通は人が見ないところにもあったりする。こうした痕跡は、ある程度知識がないと見過ごす。建物や遺跡がいつ、どのように建ったかを知らないと、痕跡は、単なる傷であったり、へこみと思ってしまうからである。どんな痕跡があり、どのように観察してきたかを、民家・町並み、古代遺跡、東南アジアでの経験を事例として丁寧に記述し、痕跡から建物や遺跡の変遷をさぐった活動を紹介した。

痕跡を辿ることは、建物や遺跡が造られた当時の様相を知っていくことになる。当時の道具、素材、職人の技術、建てる際の慣習などである。痕跡を辿り変遷を知る、逆に変遷を想定して痕跡を確かめていく。痕跡と事実との間を往復しながら、歴史を明らかにして行く作業である。もちろん、考えても分からないことがあるし、現地で気付かないこともある。

やや大げさに書くと、古い建物や遺跡が専門家に、ちゃんと自分を見て欲しい、と言って訴えているように思うことがある。そこにある痕跡が、それぞれの建物・遺跡の歴史を語っているのに、ちゃんと見ていないために、歴史を見失っているよ、と言っているのである。研究が進んでいても分からないことは、日本の民家・町並み、古代遺跡にも多いし、東南アジアの建物・遺跡には山積の課題がある。私自身すこしずつ解きほぐして行きたいし、この本を契機に次世代の方々が、痕跡に関心を持って頂くことを期待している。



前野まさる　画

会員からの声

■サワナケート歴史地区

磯野哲郎

ラオスの中南部に位置するサワナケートは、タイ東北部と同じように、ジャヤーバルマン 7 世の 12 世紀末まではクメールの支配下にあった。14 世紀半ばにルアンパバーンに興ったラーオ族初の統一王朝ランサーン王国が 1560 年にビエンチャンに遷都した以降、版図となったが、18 世紀の王国分裂後はタイの属国となった。

インドシナの植民地化を進めていたフランスは、1893 年、タイとの仏泰戦争の結果、メコン川東岸を領土に加え、1905 年にはフランス領インドシナが完成した。

サワナケートの町は、それ以降、フランスによって建設され、整備されてきた。1900 年には、既に郵便・通信局が設置され、メコン川とその支流に沿った町との通信連絡網が作られていた。当時は、道路網が整備されておらず、水運が主であった。しかし、実際に行政や治安を司るフランス人官吏は少数で、仏領インドシナの中心であった今日のベトナムからのベトナム人や華僑が建設や商売に従事した。歴史地区は、メコン川に沿い行政地区と少し上流の商業地区から成るが、その境界にあるかつての市場であった広場には、カトリック教会や商家が並んでいる。商家の中には、当時のオーナーであるベトナム人や華僑の名前を刻んだ建物も多い。

2006 年末、メコン川に国際橋が架かり、ベトナムのダナンやフエから高規格道路でタイやミャンマー

かつての市場であった広場の俯瞰

まで行けるようになった。いわゆる東西経済回廊である。その恩恵を受けて町は発展しているが、歴史地区の建物は、解体されたり、改築されたりと、徐々に消滅しつつある。100年に満たない建築であること、建設もベトナム人や華僑だったこともあり、今の住民たちは保存に関心がない。県病院、県博物館、学校等の公共建築と、レストランやブティックホテルとして活用しようという少数の民間だけが、修復を試みているが、技術的な問題もある。本来はレンガ造の躯体に漆喰の壁、レンガ色の素焼スレート瓦葺きであった建物は、モルタルにペンキ塗り、トタンやセメント瓦葺きに置き換えられ、オリジナルとは別物に成るケースも多い。崩壊するまで残された時間は短い。何とか、保存・再生を進められないものだろうか。

■ハイチの文化財保護とアルベール・マンゴネス

荒井芳廣

2010年1月12日にハイチ共和国で起きたマグニチュード7の地震は、他の地域での同じ規模の地震と比べはるかに大きな被害をもたらした。被害を倍加した要因は、地震以前から問題視されていた政治的経済的生態的脆弱性にあった。壊滅的ともいえる状況からの再建の道は1年以上たった今も模索中の段階である。このままではハイチという国のアイデンティティを形成する歴史的過去を象徴するものが失われてしまうという危惧から、古い世代の歴史家、建築家、都市計画家の声を聴くことの重要性が指摘されている。その一人であるアルベール・マンゴネス（1917~2002）は首都のポルトープランス生まれの建築家、都市計画家、彫刻家、画家である。1940年代末から1980年代前半までのポルトープランスの都市計画の多くに携わっているが、国際的には、地震で破壊されたままの姿をさらす大統領府近くの小広場に設置された「名の知れぬ逃亡奴隷」（1968）の像の作者として知られている。1972年には、現在の「国立文化財保護研究所」（ISPAN, Institut de Sauvegarde du Patrimoine National）の前身である全国記念建造物・史跡サーヴィス（Service National des Monuments et des Sites Historiques）を創設している。彼自身はこの地震を経験してはいないが、皮肉なことに地震の起きた2010年1月号の『国立文化財保護雑誌』（Bulletin de l'ISPAN No. 8）は、彼の業績と彼がその修復に関わったハイチの世界遺産シタデル（Citadelle）の特集号であった。地震後もこの雑誌は月間で発刊され、地震の被害も逐次報告、2010年12月号では首都最大の市場マルシェ・イポリットとそれに接する歴史地区の再建計画が特集されている。再建のための調査にはポルトープランスの都市史の専門家ジョルジュ・コルヴィントンの著作が参照されている。A・マンゴネスも係わった観光・広報省編『ハイチの観光資源調査報告書：第1巻ポルトープランス』や彼が編集していた雑誌『ハイチの輝き』（Reflets d'Haiti）に寄稿した都市論を集めた『丸ごと都市性』（En toute urbanite, 2001）も耳を傾けるべき資料である。

前野まさる　画

事務局日誌

（2010年11月16日～2011年2月10日）

12/2	定例会議を行い、第4回拡大理事会および2010年次総会の議題を協議。同時開催の研究会について内容を確認。
12/6	財団法人ユネスコ・アジア文化センターより、『ACCU news No.379』を受領。
12/10	神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市世界遺産登録推進委員会より、『「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録に向けた国際専門家会議』（2010年6月23、24日開催）実施報告書を受領。
12/13	高橋暁氏より、『世界遺産を平和の砦に　―武力紛争から文化を守るハーグ条約―』を受領。
12/15	インフォメーション誌8-4号発行、会員に順次発送。
12/18	日本イコモス国内委員会2010年次第4回拡大理事会、年次総会、研究会「産業遺産の世界遺産登録」、懇親会を開催（於 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 地下1階 会議室、セミナー室、ロビー）。それぞれ21名、61名、91名、56名が参加。
12/20	上智大学アジア人材養成研究センターより、『アンコール遺跡を科学する　第16回アンコール遺跡国際調査団報告』を受領。
12/21	パリ本部より、2011年度用のICOMOS会員カードを受領。
12/24	奈良文化財研究所より、『文化的景観研究集会（第2回）報告書　生きたものとしての文化的景観　―変化のシステムをいかに読むか―』を受領。
12/27	三重大学花里利一氏より、国際セミナー「五重塔はなぜ倒れないか　ギリシャ神殿はなぜ倒れないか　―法華経寺五重塔での世界初の耐震性観測―」（2010年11月20日、法華経寺・三重大学・日本イコモス国内委員会共催）の配布資料を受領。
12/28	韓国ICOMOSより、憲章集を受領。
1/6	群馬県企画部世界遺産推進課より、「シルクカントリー in 下仁田」（2010年9月4、5日開催）報告書を受領。
1/13	2011年度用のICOMOSカードを発送。
1/17	広報企画会議を開き、インフォメーション誌8-5号の編集方針を協議。
2/4	東京倶楽部助成金事業「CIIC-日本イコモス国内委員会共同国際研究会」の第3回国内研究会を実施。
2/4	新潟県教育庁文化行政課より、世界遺産国際シンポジウム「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」（2010年10月17日開催）の実施記録を受領。

編集後記

今号では、著書紹介のコーナーを設けています。「自著を語る」と題し、第一弾を上野邦一氏にお願いしました。今後も、従来の国際会議等の報告とともに、日本イコモス会員の活動や研究の成果を紹介していければと思います。(F)

昨年12月に年次総会を終え、その記録の取りまとめをしているうちに、新年次もすでに2ヶ月ほどが過ぎ去ってしまいました。歳をとるにつれ時間の過ぎるのが一段と早くなるようで、とぼやきながらも、新たな年に何が起こるか楽しみな気もしております。(Y)

日本イコモス国内委員会　維持会員（代表者）

株式会社　尾田組（尾田芳信）
株式会社　都市環境研究所（小出和郎）
株式会社　プレック研究所（杉尾伸太郎）
株式会社　トリアド工房（伊藤民郎）
西武建設株式会社（大澤茂治）
「善光寺の世界遺産登録をすすめる会」（仁科恵敏）
株式会社　丹青社（渡辺　亮）
株式会社　ゴールデン佐渡（澤邊一郎）
株式会社　鴻池組（蔦田守弘）
株式会社　乃村工藝社（乃村義博）
株式会社　文化財保存計画協会（矢野和之）
「国宝松本城を世界遺産に」推進委員会（菅谷　昭）
株式会社　小林石材工業（小林美和）
テック大洋工業株式会社（鳥潟浩司）
佐渡市（高野宏一郎）

（敬称略・順不同）

日本イコモス国内委員会の活動には以上の企業・団体のご支援をいただいております。

●日本イコモス国内委員会

【第８期 執行部メンバー】（順不同）

委員長	西村　幸夫
副委員長	赤坂　　信
	小野　　昭
	河野　俊行
理事	尼崎　博正
	稲葉　信子
	苅谷　勇雅
	岸本　雅敏
	清水　真一
	杉尾　邦江
	鈴木　博之
	西浦　忠輝
	濱崎　一志
	前田　耕作
	三宅　理一
	宗田　好史
	山田　幸正
	渡邊　保弘
監事	沢田　正昭
	崎谷　康文
顧問	伊藤　延男
	坪井　清足
	石井　　昭
	前野　まさる
事務局長	矢野　和之
本部執行委員	岡田　保良

【小委員会主査】

第三小委員会（憲章）	藤井　恵介
第四小委員会（世界遺産）	稲葉　信子
第五小委員会（プロブディフ）	石井　　昭
第六小委員会（鞆の浦）	益田　兼房
第七小委員会（白川郷）	西村　幸夫
第八小委員会（バッファゾーン）	崎谷　康文
第九小委員会（朝鮮通信使）	三宅　理一
第十小委員会（彩色）	窪寺　　茂
第十一小委員会（歴史的都市マスタープラン）	岡田　保良
第十二小委員会（技術遺産）	伊東　　孝

●ICOMOS とは

ICOMOS は、1964 年、「記念物と遺産の保存に関する国際憲章（通称ヴェネツィア憲章）」によって設立された国際 NGO です。第 1 回総会は 1965 年 6 月に、ポーランドで開かれました。1972 年にユネスコ総会で世界遺産条約が採択された後、NGO として、ユネスコをはじめとする国際機関と密接な関係を保ちながら、世界文化遺産の保護・保存、そして価値の高揚のための重要な役割を果たしてきました。文化遺産保護の原理、方法論、科学技術の応用、また、世界遺産選定の審査、監視の活動を続けています。現在、110 以上の国からおよそ 9,500 名の専門家が参加しており、28 の国際学術委員会を通じて様々な専門分野、テーマ別の活動が行われています。

日本イコモス国内委員会は 1972 年にブタペストで開かれた第 3 回イコモス総会で承認され、関野克博士がその委員長に指名されました。1979 年に規約を採択し、イコモス本部執行委員会での承認を経て正式に発足しています。国内の文化遺産保存技術を高め、様々な情報を収集・交換し、後継者への技術的訓練を行う一方、各国の委員会やパリ本部と協力して、世界の文化遺産の保護のための国際協力活動を担っています。2011 年 1 月現在、会員 369 名、維持会員 15 団体によって構成されており、専門的な調査研究を行う 10 の小委員会を設置しています。年次総会のほか、年 4 回の理事会、研究会、来日外国人専門家との懇談会などの開催や会報の発行を行っています。

■日本イコモス ISC メンバー表（仮）　○は、各 ISC の日本代表

委員会名	略称	委員
Analysis and Restoration of Structures of Architectural Heritage	ISCARSAH	○花里　利一・岩崎　好規・坂本　功・西澤　英和
Archaeological Heritage Management	ICAHM	○岸本　雅敏・小野　昭
Conservation/Restoration of Heritage Objects in Monuments and Sites	ISCCR	
Cultural Landscapes	IFLA	○杉尾 伸太郎・石川 幹子・大野 渉・本中 眞・山田 素子
Cultural Routes	CIIC	○杉尾　邦江・大野　渉
Cultural Tourism	ICTC	○宗田　好史・石井　昭・山内　奈美子
Earthen Architectural Heritage	ISCEAH	○岡田　保良・渡辺　邦夫
Economics of Conservation	ISCEC	
Fortification and Military Heritage	IcoFort	
Historic Towns and Villages	CIVVIH	○福川　裕一
Intangible Cultural Heritage	ICICH	稲葉　信子・秋枝 ユミ イザベル
Interpretation and Presentation	ICIP	○門林　理恵子
Legal, Administrative and Financial Affairs	ICLAFI	○河野　俊行・八並　簾
Mural Paintings	ISCMP	
Pacific Islands		
Polar Heritage	IPHC	
Recording and Documentation	CIPA	山田　修
Risk Preparedness	ICORP	○益田　兼房・土岐　憲三・大窪　健之
Shared Built Heritage	ISCSBH	○布野　修司・村松　伸
Stained Glass		
Stone	ISCS	○西浦　忠輝・石崎　武志
Theory and Philosophy of Conservation and Restoration	ISCTC	○秋枝 ユミ イザベル・西村　幸夫
Training	CIF	○稲葉　信子・福島　綾子
Underwater Cultural Heritage	ICUCH	○荒木　伸介・池田　栄史
Vernacular Architecture	CIAV	○山田　幸正・大野　敏
Wood	ICC	○渡邊　保弘・土本　俊和
Rock Art	CAR	○小川　勝・五十嵐 ジャンヌ
20th Century Cultural Heritage	ISC20C	○鈴木　博之・山名　善之

JAPAN ICOMOS/INFORMATION
Vol.8, No.5 10 MARCH 2011
日本イコモス国内委員会　委員長　西村幸夫
事務局長　矢野和之　　編集　山田幸正
〒101-0003　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　岩波書店一ツ橋ビル 13 階
株式会社　文化財保存計画協会　気付
Tel & Fax: 03-3261-5303　e-mail: jpicomos@japan-icomos.org
http://www.japan-icomos.org/

JAPAN-ICOMOS　National Committee Secretariat
c/o Japan Cultural Heritage Consultancy
Hitotsubashi 2-5-5-13F, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0003, japan
Tel & Fax: +81-3-3261-5303　e-mail: jpicomos@japan-icomos.org
http://www.japan-icomos.org/